別紙１－１

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※　乙　第　号

氏　　名　城田　千代栄

論　文　題　目

Long-term outcomes after revision of Kasai portoenterostomy for biliary atresia

（胆道閉鎖症に対する再採掘術（再葛西手術）の長期予後）

論文審査担当者

主　査　委員　名古屋大学教授　柳野正人

委員　名古屋大学教授　小寺泰弘

委員　名古屋大学教授　後藤秀実

指導教授　関田広夫

別紙１－２

論文審査の結果の要旨

胆道閉鎖症の初回術後の再黄疸や繰り返す胆管炎に対する治療として、肝移植術の有効性が確立された現在では再採掘術は選択されなくなってきた。しかし、肝移植後の長期予後や癌発生率などは未だ不明瞭である。再採掘術の有効性と長期自己肝生存率についての報告はほとんどなく、改めて評価することが求められている。今回の検討によると、繰り返す胆管炎症例には再採掘術は有効で全例長期自己肝生存が得られていた。初回手術後に一旦は減黄した再黄疸例では75％が減黄し25％が長期自己肝生存していた。初回手術で減黄しなかった減黄不良例に対しての再採掘術は一般的には無効であるとされているが、31％が減黄し25％が長期自己肝生存していた。自己肝生存している症例は再採掘時期が早い傾向にあった。肝移植術を行なった患者の皮膚切開から肝切除までに要した時間は、再採掘術を行なった症例と行なっていない症例で有意な差は認められず、肝移植後の生存率も両者に差は認められなかった。この結果、限定的な効果ではあるが、再採掘術は適応と時期を選択すれば長期自己肝生存を得られ、肝移植の回避が期待できる。

本研究に対し、以下の点を議論した。

1. 現在標準的な胆道閉鎖症の治療は、葛西手術が奏功しなければ肝移植移植を行うというものであり、肝移植の妨げになることを理由に再採掘術に対して否定的な意見が多い。しかし、再採掘術により54％の患者が自己肝生存を得られたという報告もある。今回の我々の検討では、再採掘術は肝移植に対して悪影響を及ぼすことはなく、移植時期を遅らせる効果も認められたことから、再採掘術は肝移植を考慮しても否定的な手術ではないと考えられる。
2. 長期自己肝生存を目指すためには、胆汁鬱滞による肝障害を進行させないことが重要である。今回、再採掘後に自己肝生存している初回手術から再採掘術までの期間が短かいという結果が得られたこともこの考え方を支持するものである。
3. 再再採掘術の肝移植に与える影響については評価できておらず、再黄疸例、減黄不良例とも再再採掘で改善していないことから適応はないと考えられる。しかし、胆管炎症例では２例中２例とも自己肝生存が得られていることから、胆管炎のない黄疸例と胆管炎例は病態が違うと考え、胆管炎例には再再採掘を積極的に考慮すべきことがわかった。

以上の理由により、本研究は博士（医学）の学位を授与するに相応しい価値を有するものと評価した。

別紙２

試験の結果の要旨および担当者

報告番号	※乙第　　号	氏　名　城田　千代栄
試験担当者	主　査	柳野正人　小寺泰弘　後藤満一
	指導教授	内田広夫

（試験の結果の要旨）

主論文についてその内容を詳細に検討し、次の問題について試験を実施した。

1. 肝移植に与える影響について
2. 再採掘時期と自己肝生存について
3. 再再採掘術の適応について

以上の試験の結果、本人は深い学識と判断力ならびに考察力を有するとともに、小児外科学一般における知識も十分具備していることを認め、学位審査委員合議の上、合格と判断した。

別紙３

学力審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※乙第　　号	氏　名　城田　千代栄
学　力　審　査 担　　当　　者	主　査　郁野征人　小寺泰弘　後藤雅博 指導教授　内田信夫	

（学力審査の結果の要旨）

名古屋大学学位規程第１０条第３項に基づく学力審査を実施した結果、大学院医学系研究科博士課程を修了したものと同等以上の学力を有するものと学位審査委員合議の上判定した。